様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　５ 月 ２６ 日現在

機関番号：３２６８０
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｋ０２２２５

研究課題名（和文）対抗の歴史からみた社会福祉の形成過程の分析

研究課題名（英文）Analysis of the social welfare process in terms of multiple conflicting opinions

研究代表者
野口　友紀子（Noguchi, Yukiko）

武蔵野大学・人間科学部・教授

研究者番号：２０３８７４１８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円

研究成果の概要（和文）：戦前、戦中、戦後の社会福祉の従来の研究とは異なる知見を提示できた。1880年代の富裕層の女性の慈善活動が先行研究では否定的に扱われていたことを見直した。戦中は、戦時下の厚生事業を社会事業の変容と捉える先行研究に対し、当時の雑誌記事を分析し、社会事業の具体的な当時の人びとの認識を明らかにした。戦後は、１つには社会福祉の研究が占領期の福祉政策を論じることが多いのに対して、雑誌分析を通して当時の福祉事業に関わる人びとの意見を拾い上げ都市社会事業が戦後に目指したものを明らかにした。２つには社会保障制度審議会の勧告等の分析から60年代のグランドデザインを明らかにし、社会保障と社会福祉の関係を検討した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
社会福祉の歴史研究には、多くの蓄積があるが、先行研究で示された分析視角を踏襲するものや、ジェンダーの視点の欠如がある。今回の研究は、先行研究で否定された内容を再検討したり、従来の研究では分析に使用しない素材で分析を行った。その結果、女性の慈善活動の再評価ができた。また、雑誌分析を通して、当時の社会事業に関わる実践、行政、研究を行なった人びとの論考を整理し、戦時中の厚生事業に対する人びとの認識、さらに戦後の都市社会事業に対する人びとの認識を明らかにした。さらに、社会保障制度審議会の勧告等の分析から50年から60年代当時の審議会構成員が目指した社会保障の方向性を示すことができた。

研究成果の概要（英文）：We were able to present findings that differed from previous studies of social welfare before, during, and after World War II.We reviewed the philanthropy of wealthy women in the 1880s, which had not been recognized in previous studies.With regard to the wartime period, we analyzed magazine articles of the time in response to previous studies that viewed wartime social work（kouseijigyo） as a transformation of social welfare. In the postwar period, while social welfare research often discusses welfare policies during the Occupation period, my study picked up the opinions of people involved in welfare services at that time through journal analysis and clarified what urban social work aimed at in their postwar policies. Another study clarified the grand design of the 1960s through analysis of the recommendations of the Council on Social Security System and other factors, and examined the relationship between social security and social welfare.

研究分野：社会福祉学

キーワード：社会福祉史　社会事業　婦人慈善会　厚生事業　都市社会事業　社会保障制度審議会　慈善　『社会事業』

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

報告者はこれまで一貫して社会福祉の成立過程を分析している。今回は社会福祉の成立過程を「対抗」という視点から、対抗するもののせめぎ合いの中で徐々に社会福祉に形作られていくものと捉えている。具体的にいうと、本研究は社会福祉が近代以降、他領域の教育や社会政策などとともに形成途上にあり、当時の社会福祉関係者は他領域の事業と考えられたものとの対抗と同調の認識の中で、社会福祉を形作ってきたと捉えている。そして、社会福祉関係者の中でも社会福祉に対して多様な考えがあり、相互に批判したり賛同したりしながら徐々に社会福祉というものを作ってきたと考えている。社会福祉と他領域の関係性、社会福祉の内部の多様な意見が徐々に社会福祉のゆるやかな定義になっていくのである。

そのため、分析には既存の社会福祉史に見られる本質主義とは異なり、構築主義的な視点をとる。分析素材は当時の雑誌、図書、新聞などである。この研究と既存の研究との違いは、社会福祉を当時の関係者たちの認識や考えから形作られていると捉えているところである。

先行研究として、社会福祉学における社会福祉の成立に関わる歴史の著作の代表的なものに次のものがある。日本社会事業大学救貧制度研究会編(1960)『日本の救貧制度』勁草書房、池田敬正（1986）『日本社会福祉史』法律文化社、吉田久一（1990）『改訂増補版現代社会事業史研究』川島書店、池本美和子（1999）『日本における社会事業の形成』法律文化社などである。

これらの研究は、社会福祉事業の形成がその時代の社会経済的状況や政治的状況を要因としていることを背景に記述されている。社会福祉事業の成立要因は広範であり、通史的な記述がなされている。慈善事業や感化救済事業から社会事業、社会福祉となっていく過程をこれらの要因から描くことは、社会福祉の本質が社会生活上に生じる課題への対策であると考える社会福祉の歴史を描いている。このことは、歴史学者からすでに指摘されており、社会福祉の歴史の記述は社会問題を明らかにしてその対策としての社会福祉事業を描く「問題−対策型」（成田龍一（2000）『歴史学のスタイル』校倉書房、261 頁）であると言われる。

本研究は、しかしながら従来の社会福祉の歴史研究が問題への対策の展開過程という視点を持つことに対し、別の観点から社会福祉の歴史を描くことを主眼とする。これが他領域と社会福祉との相互関係、社会福祉内部の対立関係による対抗の歴史という視点である。この研究課題の根本は社会福祉とは何かという問いである。一般的に社会福祉の歴史を研究する場合、社会福祉とは何かという問いを立ててから研究を開始することはなく、すでに社会福祉というものが存在していることを前提として始められる。それは概ね「人びとが生活を営むときの仕組み」の歴史である。

社会福祉の歴史研究の領域は、近代以前であれば地域の相互扶助の仕組みの歴史、近代以降では制度史、政策史、慈善家個人の実践や人物に焦点を当てた歴史、民間団体の活動の歴史、施設史、処遇史、地域での独自の取り組みの歴史などである。そして、そこで扱われる社会福祉の範囲は限定される場合が多い。例えば、保育の歴史、老人福祉の歴史などである。社会福祉の歴史とは、「人びとが生活を営むときの仕組み」の歴史であり、それは上記の内容を研究対象の範囲として描かれている。

一般的に社会福祉の歴史研究は、社会福祉には対象となる社会問題があり、その社会問題に人びとがあるいは国家がどのように取り組んだのか、あるいは取り組まなかったのかが描かれる。社会福祉というものが存在していることが前提になっていると先述したが、それは社会福祉が取り上げるべき当時の社会問題について、今の研究者がすでに知っていることを前提としているという意味である。「社会福祉」自体は第二次世界大戦後に一般的に使われるようになった用語であり、その前身は「社会事業」という用語で、1920 年前後に使われるようになった。それ以前は「社会事業」は存在せず、別の名称で呼ばれていた。呼び名の変化は事業内容や事業に対する認識の変化であり、社会福祉（＝社会事業）に確固としたものはなかった。「社会福祉」は現在の社会福祉の歴史研究が範囲とする時代には明らかに形成途上であったのである。当時の人びとはその時まさに社会福祉（＝社会事業）とは何かを考え、模索しつつあった。そうであるにも関わらず、社会福祉の歴史研究において取り上げられる社会福祉の対象となる社会問題は、今の研究者が判断したことなのである。

このように考えると、現行の社会福祉の歴史研究は、その時代に生きた人びとの社会福祉（＝社会事業）に対する認識を反映していない。そのため現代の視点から対象となる社会問題の設定をしないで描くことが必要である。社会福祉は他領域の事業との関係や社会福祉内部の人びとの考えが対抗することによって形成変化したものである。

２．研究の目的

この研究は、社会福祉（＝社会事業）の成立過程の歴史を描くことを目的としている。当時の人びとが社会福祉として形作ろうとしていたものとは何かについて、当時の人びとによるその問いへの答えを集めて分析する。その分析には、教育や社会政策と呼ばれる事業内容との重なりや関係を中心とした史料を素材とする。社会福祉の形成過程を社会福祉と他領域との関係性から、加えて社会福祉内部の見解の分析から、概念上、実際上の「対抗の歴史」として描くことを主眼とする。

従来の「問題−対策型」の社会福祉の歴史とは異なる社会福祉の成立過程の記述となる。社会問題をあらかじめ設定しないことは、対策である社会福祉の中身や範囲も限定されずに社会福祉の歴史を記述できる。このような記述は、社会福祉が対象とする解決すべき課題をある時代の

人びとはその当時何と捉えていたのか、解決策である社会福祉の具体的な事業内容と隣接する領域との関係をどのように捉えていたのかを明らかにできる。

この研究の重要な点は、２点ある。第１に、ある時代に生きた人びとのその時代の社会問題への認識をそのまま描きだすことができることである。現代の研究者が社会問題を設定する視点では捉えきれない多様な問題群が社会福祉（＝社会事業）で対処すべき問題として当時の人びとに意識されていたことがわかる。第２に、現代の観点では教育や司法や社会政策の領域として社会福祉の歴史研究からは捨象される事柄も拾い上げることができる。これは社会福祉と他領域と関係をダイナミックな視点で捉えるとともに、同じ社会福祉の領域内での多様な考えの中をダイナミックな視点で捉えることになる。この視点を採用すると社会福祉が他領域との関係のなかで形成され変化する過程として描くことができる。

３．研究の方法

当時の人びとが理解していた社会問題や社会福祉（＝社会事業）を分析するために、当時の雑誌に掲載された論文や講演録、新聞の論説などを使う。その時代に生きた人びとの実際の認識や感覚を分析素材とし、当時理解されていた社会問題、対策として想定された事業内容や実施された事業などを社会事業とは何かという問いを明らかにするために関連する雑誌などから類型化する。また他領域の雑誌などから対抗する考えや認識の類型化を行う。

近代以降の日本において、明治 10 年代の慈善の活動の時期を始点とし、第二次世界大戦後の社会福祉という用語が一般的に使用され、戦後の福祉のあり方を方向づけた 60 年代の時期を終点とする、1880 年代から 1960 年代までの時代を設定した。

４．研究成果

1880 年代から 1960 年代の社会福祉の従来の歴史研究とは異なる知見を提示できた。明治初期の活動である 1880 年代の富裕層の女性の慈善活動が先行研究では否定的に扱われていたことを見直した。これは『女学雑誌』『女学新誌』の分析を通して、婦人慈善会の活動が女性の慈善活動が当時の養老院や施療病院などの経営に寄与していたこと、女性たちの活動が全国的な女性の組織化につながったこと、家庭の延長に慈善活動があったことを明らかにした。この研究は女性の行った慈善活動を社会福祉の歴史の初期の活動として位置づけるための最初の研究となるだろう。

戦中の研究については、戦時下の厚生事業を社会事業の変容と捉える先行研究に対し、当時の雑誌『社会事業』『厚生問題』を分析し、厚生事業の具体的な当時の人びとの認識を明らかにした。社会事業は厚生事業と名前を変え、社会事業概念を変更した。そして、国民生活という新たな対象への取り込みを行い、生活指導という事業内容を見出した。これは、戦時下で要請された生産力増強という目的に直接つながる生活改善や生活指導だけでなく、生産力増強とは直接繋がらない生活の確保や安定といったことも含まれていた。このことは社会事業関係者たちが従来の社会事業を戦争という状況に適応させた方法であったと考えられる。

戦後を設定した研究は２つある。１つは、都市社会事業に関するものである。ここでは社会福祉の研究が占領期の福祉政策を論じることが多いのに対して、雑誌『社会事業』の分析を通して当時の福祉事業に関わる人びとの意見を拾い上げ都市社会事業が戦後に目指したものを明らかにした。社会事業を具体的な都市の問題とその解決策としての社会事業という構図では捉えておらず、都市社会事業では、ニーズを持つであろうと思われる都市の人びとをつなげて集団とすることを組織化と呼び、その組織化を行うことと捉えていたことがわかった。

もう一つは、社会保障制度審議会の勧告等の分析から 60 年代のグランドデザインを明らかにし、社会保障と社会福祉の関係を検討した。この社会保障のグランドデザインは、社会福祉に２つの影響があった。１つは社会保障制度に社会福祉が位置づいたことで、社会福祉は制度上の地位を獲得したことであった。ここには社会福祉が恩恵ではなく、国家責任によって実施されることも含まれた。このことは、社会福祉が二義的であったり、代替であったり、補完であったりしたことから格上げされたことを意味する。２つには社会福祉関係者たちは社会福祉の本質を議論する際に、社会政策の呪縛から逃れられたことであった。このことは、経済学者が資本主義社会との関係で労働者か労働していない者かという区分で社会事業を捉えようとしていたことに対して、社会保障制度という概念が登場したことで社会福祉は労働していない者という枠から抜け出し、独自性を考えることができるようになった。

なお上記の社会福祉史の研究以外に、研究方法を検討しまとめた。これは、社会福祉史研究に構築主義アプローチによる言説分析の可能性を探るものである。新たなアプローチは、新たな社会福祉史像を浮上させるだろう。

[共著]

(1) 分担『現代社会福祉分析の再構築』（第 8 章　皆保険皆年金体制と社会福祉）中央法規出版、pp.161-177、令和 4 年 9 月
(2) 分担『社会福祉の歴史研究の方法』「社会福祉史における構築主義と言説分析の可能性」近現代資料刊行会、pp.429-451、令和 4 年 10 月

[研究論文]

(1) 「都市社会事業にみる地域組織化論–1946-60 年の『社会事業』の議論から–」『武蔵野大学人間科学研究所年報』第 10 号、pp.1-12、令和 3 年 3 月

(2) 「社会保障制度にみる社会福祉の位置づけ―皆保険・皆年金の議論から―」【依頼論文】社会事業史学会『社会事業史研究』第 62 号、pp.31-45、令和 4 年 12 月

(3) 「戦時下の新たな社会事業概念―国家政策・国民生活・国家介入―」『武蔵野大学人間科学研究所年報』第 12 号、pp.13-25、令和 5 年 3 月

(4) 「慈善のはじまりと展開―『女学雑誌』にみる婦人慈善会の活動の意味―」『東京社会福祉史研究』17 号、pp.5-20、令和 5 年 5 月（刊行予定）【査読あり】

[学会報告等]

(1) 「戦時下の社会事業と厚生問題–雑誌『厚生問題』にみる厚生事業の位置付け–」日本社会福祉学会第 67 回秋季大会（於：大分大学）、令和元年 9 月 22 日

(2) 「慈善のはじまりと展開–婦人慈善会にみる慈善の意味」東京社会福祉史研究会第 171 回例会報告、令和 4 年 2 月 26 日

(3) 「社会保障制度にみる社会福祉の位置づけ―皆保険・皆年金の議論から―」社会事業史学会、第 50 回記念大会シンポジスト、令和 4 年 5 月 14 日

(4) 「『女学雑誌』にみる明治半ばの貧困論―女性に求められたもの―」東京社会福祉史研究会第 182 回例会報告、令和 5 年 2 月 25 日

[学会報告要旨集]

「社会保障制度にみる社会福祉の位置づけ―皆保険・皆年金の議論から―」『社会事業史学会第 50 回記念大会報告要旨集』、令和 4 年 5 月

なお、最終年度には研究論文について「対抗の歴史からみた社会福祉の形成過程の分析　平成 31 年度～令和４年度 基盤研究 C 19K02225」として研究成果報告書をまとめた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 野口友紀子	４．巻 10
２．論文標題 都市社会事業にみる地域組織化論 ： 1946-60 年の『社会事業』の議論から	５．発行年 2021年
３．雑誌名 武蔵野大学人間科学研究所年報	６．最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 野口友紀子	４．巻 62
２．論文標題 社会保障制度にみる社会福祉の位置づけ―皆保険・皆年金の議論から―	５．発行年 2022年
３．雑誌名 社会事業史研究	６．最初と最後の頁 31-45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 野口友紀子	４．巻 12
２．論文標題 戦時下の新たな社会事業概念―国家政策・国民生活・国家介入―	５．発行年 2023年
３．雑誌名 武蔵野大学人間科学研究所年報	６．最初と最後の頁 13-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 野口友紀子	４．巻 17
２．論文標題 慈善のはじまりと展開―『女学雑誌』にみる婦人慈善会の活動の意味―	５．発行年 2023年
３．雑誌名 東京社会福祉史研究	６．最初と最後の頁 5-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　1件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 野口友紀子
2．発表標題 慈善のはじまりと展開ー婦人慈善会にみる慈善の意味ー
3．学会等名 東京社会福祉史研究会
4．発表年 2022年

1．発表者名 野口友紀子
2．発表標題 戦時下の社会事業と厚生問題 －雑誌『厚生問題』にみる厚生事業の位置づけ－
3．学会等名 日本社会福祉学会第67回秋季大会
4．発表年 2019年

1．発表者名 野口友紀子
2．発表標題 『女学雑誌』にみる明治半ばの貧困論―女性に求められたもの―
3．学会等名 東京社会福祉史研究会第182回例会報告
4．発表年 2023年

1．発表者名 野口友紀子
2．発表標題 社会保障制度にみる社会福祉の位置づけ―皆保険・皆年金の議論から―
3．学会等名 社会事業史学会、第50回記念大会シンポジスト（招待講演）
4．発表年 2022年

〔図書〕　計2件

1．著者名 古川孝順	4．発行年 2022年
2．出版社 中央法規出版	5．総ページ数 444
3．書名 現代社会福祉分析の再構築	

1．著者名 社会事業史学会創立50周年記念論文集刊行委員会	4．発行年 2022年
2．出版社 近現代資料刊行会	5．総ページ数 706
3．書名 社会事業史学会創立50周年記念論文集　戦後社会福祉の歴史研究と方法―継承・展開・創造	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関